

安中復興まちづくり 20 周年講演会報告書

日 時 : 平成 25 年 6 月 3 日 (月)
場 所 : 島原市立安中公民館
主 催 : 安中地区町内会連絡協議会、安中地区まちづくり推進協議会
後 援 : 国土交通省雲仙復興事務所、島原市、土木学会西部支部

2013(平成 25)年 8 月

長崎大学 高橋和雄

安中地区まちづくり推進協議会会長 大町辰朗

安中復興まちづくり 20周年講演会

私たちが暮らしてきた安中地区は平成3年4月から6月にかけて相次いで発生した霧仙首巒岳の火山噴火に伴う土石流や火砕流で壊滅的な被害を受けました。

安中地区は関係機関の支援により全国的にも例がない

高上げ事業で地域の再生を回り、

その後復興まちづくりや災害伝承に取り組んできました。

平成23年3月の東日本大震災に接して、

復興まちづくりの重要性を再認識したところです。

安中復興まちづくり開始から20周年を迎えるにあたり、

この20年の活動を振り返るとともに、今後の復興、地域防災、災害伝承を考える講演会を企画しました。

平成25年

6月3日(月) 10:00~12:00

島原市立安中公民館

主催：安中地区町内会連絡協議会、安中地区まちづくり推進協議会

後援：国土交通省霧仙復興事務所、島原市、土木学会西部支部

問い合わせ先の安中地区まちづくり推進協議会会長 大町辰朗

TEL 0957-63-3143 FAX 0957-64-6529

次 日 ●10:00~10:20

1 開 会

(安中地区まちづくり推進協議会会長 大町辰朗)

2 挨拶

(安中地区町内会連絡協議会会長 前田伊朗)

3 20年の活動紹介

(霧仙首巒岳復興記念館館長 杉本伸一)

●10:20~11:20

4 記念講演

「霧仙首巒岳の大土石流災害から20年を振り返って」

(元国土交通省消防部長、

現京都府立大学大学院大学特任教授 池谷 浩)

●11:20~12:00

5 参加者とのディスカッション

(島原大学名誉教授 高橋和雄)

6 閉 会

(安中地区まちづくり推進協議会会長 大町辰朗)



霧仙首巒復興記念館からの霧仙首巒岳と安中地区の眺望
平成25年5月2日 杉本伸一氏提供

安中復興まちづくり 20 周年講演会のお知らせ

私たちが暮らしてきた安中地区は平成 3 年 4 月から 6 月にかけて相次いで発生した雲仙普賢岳の火山噴火に伴う土石流や火砕流で壊滅的な被害を受けました。安中地区は関係機関の支援により全国的にも例がない嵩上げ事業で地域の再生を図り、その後復興まちづくりや災害伝承に取り組んできました。平成 23 年 3 月の東日本大震災に接して、復興まちづくりの重要性を再認識したところです。

安中復興まちづくり開始から 20 周年を迎えるにあたり、この 20 年の活動を振り返るとともに、今後の振興、地域防災、災害伝承を考える講演会を企画しました。

日 時 : 平成 25 年 6 月 3 日 (月) 10:00~12:00
場 所 : 島原市立安中公民館
主 催 : 安中地区町内会連絡協議会、安中地区まちづくり推進協議会
後 援 : 国土交通省雲仙復興事務所、島原市、土木学会西部支部
次 第

10:00~10:20

- 1 開 会 (安中地区まちづくり推進協議会会長 大町辰朗)
- 2 挨拶 (安中地区町内会連絡協議会会長 前田勝義)
(島原市長 古川隆三郎)
- 3 20 年の活動紹介 (雲仙岳災害記念館副館長 杉本伸一)

10:20~11:20

- 4 記念講演「雲仙普賢岳の大土石流災害から 20 年を振り返って」
(元国土交通省砂防部長、現政策研究大学院大学特任教授 池谷 浩)

11:20~12:00

- 5 参加者とのディスカッション (長崎大学名誉教授 高橋和雄)
- 6 閉会 (安中地区まちづくり推進協議会会長 大町辰朗)

問い合わせ先

安中地区まちづくり推進協議会会長 大町辰朗

TEL 0957-63-3143 FAX0957-64-6529

目 次

1. 開会	1
2. 挨拶	1
主催者挨拶	1
来賓挨拶	1
3. 20年の活動紹介	2
4. 記念講演「雲仙普賢岳の大土石流災害から20年を振り返って」	5
5. 参加者とのディスカッション	20
6. 閉会	26
新聞報道記事（島原新聞、6月4日）	27

司会(榎田禎子 KTN 報道部長)

この講演会に地域の皆様もこんなにも多数参加して頂き本当にありがとうございます。私はこの災害からこの方皆様には大変ご迷惑をかけてきましたKTNの榎田と言います。司会、進行をさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

安中まちづくり推進協議会の大町より挨拶いたします。

1 開会 安中地区まちづくり推進協議会会長 大町辰朗

安中復興まちづくり 20 周年記念講演会を始めます。

司会

主催者を代表してまちづくり町内連絡協議会の前田が挨拶いたします。

2 挨拶

主催者挨拶

安中地区町内会連絡協議会会長 前田勝義

古川市長をはじめ吉岡元市長、国土交通省、
いろいろな業者の方がお出かけ頂き、安中復興
まちづくり 20 周年記念講演会を開催します。
安中地区は平成 3 年 6 月 3 日の大火砕流、平
成 5 年 4 月 28 日の大土石流により尊い人命や
家土地を失う壊滅的な被害を受け避難生活や
仮設住宅暮らしを余儀なくされたことはみな
さまの頭から消えることはないと思います。



こういう状況の中で雲仙復興事務所が開設され、国・県・市の 3 者と被災者を中心として、
地域住民が一体となり安中地区の復興が始まりました。その事業数は他の被災地では例を見
ない警戒区域内での無人化施工の採用、嵩上げ事業、土石流を活用した埋立て事業など安中
地区の復興とまちづくりが着々と進められ、ここに 20 周年の節目の年を迎えることができま
したことを大変喜んでおります。本日は元国土交通省砂防部長でいらした池谷浩先生の「雲
仙普賢岳の大土石流災害から 20 年を振り返って」という講演をお聞きし、災害当日の様子を
振り返るとともに今後の地域の振興・防災・若い世代への伝承を考えるいい機会になればと
考えています。

司会

ご来賓の方より古川島原市長から挨拶を頂きます。

来賓挨拶 古川島原市長

またあの 6 月 3 日がやってきました。22 年前、午後 4 時 8 分あの大火砕流で 43 名の方が犠

牲となりました。22年前私は現役の消防団員でただ走り回っているだけでした。夕方第三小の体育館に安中地区の方が多数避難してきているというただそれだけの情報で駆けつけさせて頂きどう声をかけたらいいいのか、何をすればいいのかただただわからずに呆然としていた自分がいたことを今しっかりと覚えています。それ以来安中地区の方々には本当に心を一つにして復興に立ち向かい長期間の避難生活をしながらも頑張っこの復興を成し遂げられてこられました。そのみなさま方のご努力に心より敬意を表するものであります。そしてここにおられる吉岡元市長さん、まさしく復興時の市長さんとしてご尽力頂き今日このように島原市の復興そして在り方を考える機会を頂いたことを感謝しています。今日元砂防部長である池谷様のお話を聞くことによりまだまだ普賢岳には大きな溶岩ドームの塊があります。雲仙復興事務所に頼らなければならないことがたくさんあります。そういったことからこれからはさらに今後の島原の在り方、安中地区の在り方を知る機会になればと願っています。20周年ということで大町さんを先頭に復興に情熱をかけてこられたことを、後の世代につないでいくことをこれから頑張っていきたいと思しますので、安中地区の皆様のこれからのご協力を心からお願いし、22年前を振り返りまして私の挨拶とさせていただきます。

司会

講演に先立ちまちづくり推進協議会の活動・歩みについて雲仙岳災害記念館の杉本副館長よりご紹介をお願いします。

3 20年の活動紹介

雲仙岳災害記念館副館長 杉本伸一

災害当時、安中公民館に勤務していたということで、今日は20年間の歩みについて概要を説明させていただきます。

「安中三角地帯」とはこの災害が契機となってできた言葉です。1991年6月30日に発生した大規模土石流の跡に導流堤の設置、水無川の氾濫を防ぐための堤防の嵩上げ計画がもち上がりました。この計画に示された水無川、導流堤に囲まれた地域が三角形になることから、この名称が生まれました。この地域は水無川堤防の嵩上げや導流堤が完成すると、この両者に囲まれ窪地となり、住環境が悪化することが予想されました。「ここに住むのは、行政ではない。私たちが安心して暮らす場



所だ。土石流の不安が残る場所で安心して生活するためには、この地域全体を嵩上げし、住宅地の土地区画整理、農地の基盤整備をする必要があると思い、一部の住民が地域住民と行政へ説明して回りましたが、当初、多くの人からは「夢のごたる事業。出来るはずがない」となかなか理解が得られなかったといえます。

1993年4月、国土交通省の直轄の雲仙復興工事事務所が開設され、国も本格的に復興工事に取り組みます。

しかし、1993年4月より5月にかけて相次いで発生した大土石流により、この地域は一部を残してほぼ消失してしまいました。消極的であった住民からも一挙に嵩上げしかない「この事業に夢をたくす」との声が上がったのです。嵩上げを決意した住民は、同年6月30日、「安中三角地帯嵩上げ推進協議会」を発足させ、7月25日、島原市文化会館ホールで総決起集会を開催して、活動を開始しました。安中三角地帯の面積は約93ha、324世帯が生活をしていました。計画では、平均6m、土砂量約330万m³、費用約91億円になりました。

この嵩上げ事業の資金は、土砂捨て場として三角地帯を利用してもらい、それにより支払いを受けたものなどです。この事業の中でもっとも苦労したのが、地権者の同意書の取付であり、民間主導のため100%の同意が必要とのことで、対象者は約540人、半年ほどで約90%の同意を得ました。

しかし事業の趣旨や方法を理解してもらえないケースもあり、役員が何度も足を運び説明しました。そうするうち、平成7年1月17日、阪神・淡路大震災が発生しました。「行政の目が阪神に向くと島原は忘れられる。嵩上げ事業は夢に終わるかも」という不安の声が皆からも出てきました。このため、連日住民への説明会や行政への働きかけを続けたのです。

1995年6月11日、嵩上げ事業安全祈願祭にこぎつけ、工事が開始されました。嵩上げ事業、土地区画整理事業、農地の基盤整備事業の完成を待つなかで、住民の間には「このふるさとの、安中のまちをどういうまちに作るのか」という事を考えようとする動きが出てきました。

土石流の発生

- 平成3年6月30日☆
大規模土石流
- 平成4年2月22日☆
砂防治山計画の基本構想
- 平成4年8月8日
土石流
- 平成5年5月~6月☆
土石流が相次いで発生
- 平成5年4月
雲仙復興工事事務所
開所



安中三角地帯嵩上げ推進協議会

- 平成5年6月30日☆
安中三角地帯嵩上げ推進協
議会発足
- 平成5年7月25日
嵩上げ総決起集会
地権者の同意取り付けが始まる
- 平成7年1月17日
阪神淡路大震災
- 平成7年6月11日☆
嵩上げ工事開始



安中地区まちづくり推進協議会

嵩上げ事業の完成を待つなかで、
「このふるさとのまちをどのようなまちに」

- 平成8年8月16日
安中地区まちづくり委員
会発足
- 平成8年10月22日☆
安中夢・計画を発表
- 平成11年1月1日
安中地区まちづくり推
進協議会発足
- 平成11年3月17日☆
われん川整備計画案を
発表
- 平成11年3月28日☆
ふるさとの森づくり
- 平成11年11月14日
雲仙普賢岳フェスティバル99
- 平成12年3月☆
小学生卒業記念梅の木植樹



安中地区町内会連絡協議会の中に安中まちづくり委員会を設置し、地元商工業者、農業、漁業者、その他から要望を聞いてできたのが、1996年の安中・夢計画です。島原半島全域で計画が進められた「がまだす計画」へ、45項目の提案がなされています。

いろいろな活動をしていくなかで町内会は、会長の任期が短いこともあり、いろいろな課題に時間をかけ検討できるような組織ではありません。まちづくりという長期的な課題に取り組むには、地域の中にメンバーを固定した組織を作る必要があると考え、農漁業者、長寿会、婦人会、青年会、育友会などの各種団体へ呼びかけ、「安中地区まちづくり推進協議会」として新たに発足しました。われん川の整備については、建設省および島原市住民による手作りの川づくりが行われ、同年11月18日に暫定オープンしました。また、われん川の整備に先立って、嵩上げ地帯で被災を免れた樹木を導流堤の袖部に移設・保存する「ふるさとの森」を整備しました。嵩上げて更地となることからふるさとの樹木を地域に残すことによって、嵩上げ後の地域住民が安中に戻ってくることを願い、住民全体でまちづくりに取り組んだのです。先日は第5小の3年生が梅の実を収穫しました。小学校を卒業する6年生が100本ずつ10年間植樹をしたもので、今では1,000本の梅の木が導流堤に植えられています。

2000年4月に、「NPO法人島原普賢会」が発足しました。発足してすぐ、噴火した有珠山の避難所を訪ね、記録集「雲仙普賢岳 噴火災害を体験して」を持参して雲仙の様子、今までの取組みについて紹介し、意見交換を行いました。2002年には火山地域の市民団体相互支援ネットワーク(略称:火山市民ネット)を立ち上げました。北海道有珠山の麓の虻田町の「NPO法人洞爺にぎわいネットワーク」、東京都三宅島の「ネットワーク三宅島」と「NPO法人島原普賢会」が連携して火山地域の市民団体相互支援ネットワーク(略称:火山市民ネット)を立ち上げ、住民によるフォーラムを毎年輪番で開催しています。このネットワークの目的は、参加団体が協力・連携し、火山災害により被災した地域の市民団体と他の被災地の市民団体をつなぎ、避難生活や生活再建に必要な情報の提供を初めとして種々の支援活動を行うものです。

火山災害と地震災害は引き起こした原因は異なるものの、被災した市民の避難や生活再建などについて共通することが多いことから、火山市民ネットで手をつないでいろいろなことに取り組みました。この後、新潟県中越地震が起きました。被災地を訪ねると火山



NPO法人島原普賢会

- 平成12年4月3日
NPO法人島原普賢会発足
- 平成12年4月8日 ☆
有珠山噴火避難者に記録誌を届ける
- 平成14年4月1日 ☆
市民火山ネットワーク設立



未来につなぐ

- 被災地の連携 ☆
- 火山地域の市民団体相互支援
雲仙、有珠山、三宅島
- 地震被災地も一緒に
新潟県中越地震被災地
最近では新燃岳噴火や東北大震災へも
- 安中防災塾 ☆
地域のことは地域で教える仕組み
ノウハウを持った地域の人が伝授
持続可能な教育
将来は受講生自らが地域リーダーに

であれ、地震であれ被災した人は全く同じ状況にあります。地震の被災地も一緒になって取り組もうということで新潟県中越地震の被災地との連携も図っています。

2011年1月新燃岳噴火に際しても、過去の火山災害の教訓を生かしてもらいたいと、3月13日に宮崎県都城市と高原町で開催された被災地車座トークに参加し、行政のみでは対応できない被災者支援対策などの情報提供を行いました。また、東日本大震災の被災地へも継続的に出向き、情報提供を行っています。嵩上げの時は、災害に遭ったこの地域をどうするか、どう復興するかということで運動が始まりました。それから安中地区全体をどうするか。まちづくりの協議会です。さらに日本の中の被災地をどうつないで、そのような被災地をどうしていくのかというのがNPOという風に段々活躍の場も広がってきています。このような活動が、20年の歩みです。

さらに地元では安中防災塾を始めました。安中防災塾は、「地域のことは地域で教える仕組み」と「持続可能な教育」を柱としています。「地域のことは地域で教える仕組み」とは、地域のことを熟知している住民が中心となって、その知識を子どもたちに伝授していく教育システムです。島原には、雲仙普賢岳の火山災害時の避難や復興のノウハウを持った人材が健在です。実際に災害を体験した地域住民から直接話を聞くことは、災害伝承の有効な方法です。

「持続可能な教育」とは、将来的には、受講生自らが地域リーダー・運営主体に育っていくことで、取り組みを持続的に展開していく住民主体の教育システムです。

最後に、20年の歳月が流れ、ますます自分たちが体験した火山災害の記憶が薄れ、風化を危惧している現在、伝承の重要性を感じています。「安中防災塾」を核とし、また火山地域のみならずその他の災害の被災地域の住民組織団体とも協力・連携し未来につなぐ活動が期待されています。

まだ災害のことを知っている人がこの地区にはたくさんいます。そういう人たちが子どもたちにノウハウを伝授していく。そして将来的には教わった子供たちが地域のリーダーに育っていく。未来に向かって活動を進めているところです。今後この活動をどう発展させていくかは池谷先生よりご提案があると思います。この活動がもっともっと活発になればと思っています。

4 記念講演「雲仙普賢岳の大土石流災害から20年を振り返って」 (元国土交通省砂防部長、現政策研究大学院大学特任教授 池谷 浩)

土石流災害から20年になるので災害を振り返る。災害を振り返るとはどういうことかという、災害の嫌なことを思い出して頂こうというのではありません。厳しかった災害に対してまちづくりとかいろんなことを皆さんはやってきました。何かをやったことによって今がある。それは今後のまちづくりにどう役立つのかを20年の節目の年にやはり1度振



り返っておいたほうがよいのではないかと思います。災害の時にみなさん各自が対応された状況は違うと思いますが、そういえば私はこの時こういうことをやったなあとか、こういうことを手伝ったよとかいうのを振り返りながら、それでは次の未来へのまちづくりはどうしたらいいのかという思いをぜひ持って頂きたいというのが前半の話です。後半は私自身も 20 数年

雲仙にかなりどっぷりといろんな面に関係させて頂いて私から見るとまだまだもっと島原のまちはいいまちになってほしいなあ、安中もいい地域になってほしいなあと思うことがいっぱいあります。そんな話の一端を紹介し、みなさんが私の話をもとに議論していただけるような場が出来るとうれしいと思います。いつも言うことですが、我々は仏像を作ることはできますが、魂を入れるのは地域のみなさんです。ここで生きていくためにみなさんがどんな魂を入れていくのか。これは東京や北海道にいる人間ではなくて地元にいるみなさんがきちっと魂を入れないといけない。みなさんのお子さんや孫や子孫が安中で生活していくうえで、うちの先祖が素晴らしいことをやってくれたなあ。おじいさんやおばあさん、父さん、母さんがすごくいいことをやってくれたなあという思いになるためにはみなさんが本気で地域を考えることが必要です。そんな話を後半にしたいと思っています。

1990年11月17日に火山噴火は始まりますが、長崎県は噴火後すぐに火山災害対策検討委員会を設置しており、これは私もメンバーに入っていたのですが、いろんな先生方も入って、どんな災害になるか最初に予想を始めたんです。まだ煙が出た段階でももちろん火山灰も降っていませんし土石流も出ていない前に我々は何を考えたか

というと予想される災害としてこの雲仙普賢岳は有史以後、平成の噴火の前は 1663 年、1792 年の 2 度噴火しています。その時に起こった現象をベースにして我々は判断しました。当面溶岩流や土石流ならずで出来ていた砂防えん堤で捕捉、土石流に対しては住民のみなさんに避難して頂くためのセンサー方式のアラームを設定しました。割と早く長崎県が動き出したので、住民のみなさんからはそういうことやってくれると安心だねと言われた記憶があります。ところが思ったことと違ったことが起こりました。まずは溶岩が流れると思っていたのが流れずに崩れ落ちて火砕流に変わりました。これは有史以来の現象でした。最近の言葉でいうと想定外でした。そして何よりもグラフを見て頂くと分かるように 5 年間火山噴火活動が続いてしまいました。火山噴火が 5 年間続くというのも予想外でした。火山は事前の予測がなかなか難しいという災害でした。

雲仙普賢岳の大土石流災害から 20年を振り返って

政策研究大学院大学
池谷 浩

噴火直後の対応

- 1990. 11火山噴火が始まるとすぐに長崎県は火山災害対策検討委員会を設置
- 予想される災害として溶岩流、降灰による土石流とし、直ちに既設砂防堰堤の除石とワイヤーセンサー方式のアラームを設置

↓
行政の早い立ち上がりは住民に安心感をもたらす

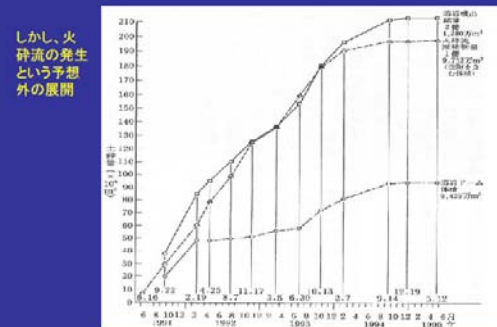
これがほかの豪雨災害や地震災害との違いです。地震というのは大きくても勝負は1分以内とか非常に短い時間で終わります。雨はどんなに長くても1週間、まあ2,3日でやみます。けれど火山災害だけは年単位です。これは雲仙だけではありません。たとえば三宅島も4年半近く島に戻れませんでした。こういうふうに火山噴火は非常に厳しい条件を我々に与えます。それに対してどう対応するかを地域のみなさんみんなと考えていかないといけないというのが火山災害です。

火山災害の中には火砕流などいろいろありますが、復興まちづくり20周年記念ということで、ターゲットとなった土石流について話します。土石流そのものは1663年や1792年には発生していません。今回は1991年2月に大きめの噴火があって火山灰が降り始め、最初は1991年5月15日に起こっています。その時も私はすぐに島原に来ました。水無川の中を橋が流れてきたりしましたが、それほど大きな被害はでませんでした。そのあと続いて土石流が特に1993年4月28日から5月2日にかけての連続的な土石流で安中の93haが壊滅状態になりました。それから20周年が一つの節目です。

このスライドは水無川です。1991年6月30日の土石流は国道57号付近からまっすぐ海に向かって抜けていきました。物理的にも科学的にもエネルギーの大きな流れがまっすぐに抜けていったという現象が起こっています。

次のスライドは1993年の土石流が水無川の三角地帯に被害を与えたものです。土石流は上から下に流れて行く。今回は下流域がやられて、国道57号と広域農道の間あたりはやられていません。当時ここに

火山噴出物の量(事前の予測は難しい)



雲仙普賢岳の土石流災害

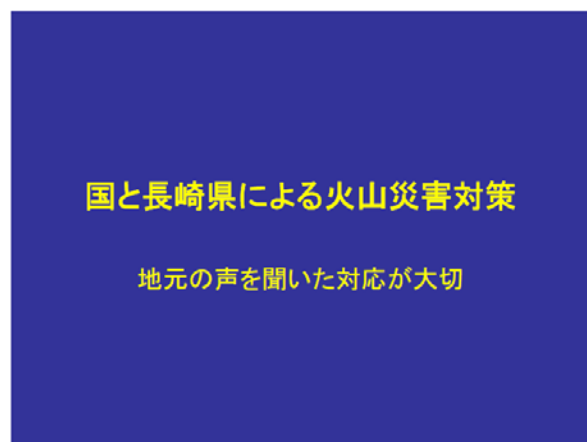
- 1990. 11. 17 噴火開始
- ~1995. 5. 25 火山活動停止宣言
- 火山灰の降下、火砕流堆積物などにより土石流が発生(過去の噴火時にはない現象が発生)



3号遊砂地を作りました。穴を掘ってここで土砂を止めました。でも水はどうしても流れてしまいます。水が流れるときに土石流のエネルギーだととても被害が大きいのですが水なので流れて一番下流まで行ったんです。土砂を含んだ水が海に入ると水の流れが止まるので土砂を全部おいてくる。海の中に土砂を置いちゃうんです。置いた土砂がたまると川底が上がるのと同じで、川底が上がると後から来た泥水は抵抗を受けて土砂を置いていきます。これが繰り返されて土砂堆積がどんどん上に上がっていくという現象です。土砂が堆積していつその上を泥水が流れるものだからこの泥水の流れる深さが堤防より低い間は氾濫しないが、河床が高くなると泥水の水位も高くなり堤防の低いところから横に氾濫し始める。専門用語で堆積遡上という現象が起きました。連続的に土石流の泥水が流れてきたために氾濫が起こったというタイプの土石流で土石流災害には間違いありません。安中地区が大変な被害を受けたということで私もマスコミの皆さんからも相当叩かれてしまいました。

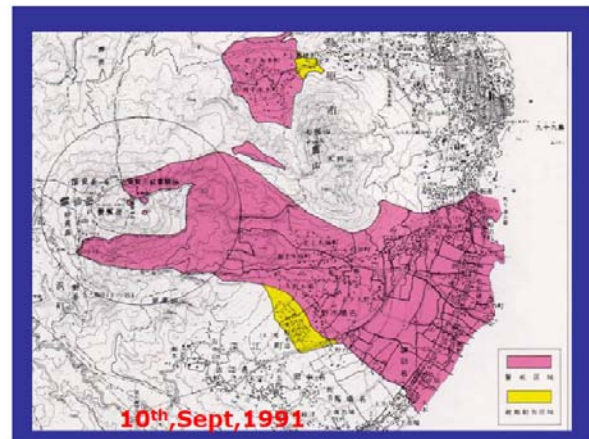
こういう災害に対してどうしたらよいかといいますと、できるだけ地元の声を聴きながらやっていこうという訳で結構頻繁に私自身は島原にお邪魔して吉岡元市長さんは当時助役でしたが、当時の鐘ヶ江市長さんといろんな話をしました。こっそり市長室で次の対策をどうしますかねという話をしながら市長室の外に出ると槌田さんのようなマスコミが外にいっぱい待っていて何を話してきたのかと聞かれ「イヤー山の状況だけ話してきました」と言っていたのですが、その時に実をいうと地元のみなさんの声はどういうことを希望しているかということを知りにきていた。皆さんの声に近いことをできるだけ対応しようという対策のために時々来ていました。後で私はマスコミに対してうそを言ったとずいぶん文句を言われたんですが、結果的に「住民のみなさんこう言ってるよ。」というのが話として広がってしまいました。現実的になかなか対策が取れないケースもありますので、とりあえず地元対策、地元のみなさんのご要望を聴くという仕組みを作ったのが、この対応の基本です。

具体的にどんなことをやったか、思い出しながら見て頂ければよいのですが、ハザードマップを作りました。最初に島原市から言われたのが、1991年5月26日だったと記憶していますが、「ハザードマップがあるよね」という話になりました。6月1,2日がちょうど土日で3日に島原市に持ってくる途中で火砕流が出たんですが、例えばこの茶色の溶岩流、これは1792年の溶岩流で2千万 m^3 をベースにするところからで



止まるということです。もう1つハザードマップでは1993年に雲仙復興工事事務所ができて山の状況が変わるたびにハザードマップを作りなおしています。合計8回は作りなおしています。まさに山の状況が変わる時にハザードマップも変わるというリアルタイムハザードマップというのですが、こういうものをやったスタートがこの雲仙火山災害です。

ソフト面では避難をするという意味で島原市と深江町で警戒区域を設定しました。住民がこれだけ住んでいるところでの警戒区域は初めてでしたが、これを設定して皆さんに大変な思いをさせてしまった原因がこれです。しかし当時の状況からするとソフト面ではまず当面命を守ることから一番基本的な対策だったと思います。一方でこの対策として当然のことながらこういうソフトで人の命を守るといのは避難でいいのですが、避難をして



いると土地とか家屋、財産、いわゆる人間以外の動けないものは全部やられてもいいのかということになります。それを防ぐためにハード対策が必要となります。ハード対策のベースになる火砕流と土石流の発生はどうか、こういう状況を知らないといけないわけです。

このスライドは熱赤外線カメラで撮った普賢岳の斜面、山の稜線です。6月4日に島原に来てこういうカメラを設置して、どこに設置したらいいか、電波をどう飛ばすか、アラームをどう作るかということをやった4日から3日間ほぼ徹夜でやって7日に東京に帰ったら8日にまた火砕流が起こったという状況でした。スライドは1991年6月15日の17時44分51秒に発生した現象ですが、白いのが100度以上の温度で



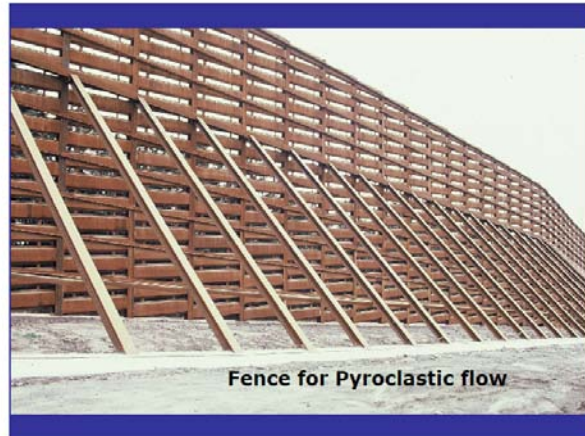
すので明らかに火砕流が発生しています。当時はこれが1分以上続いたらアラームを出すという仕組みを作っておきました。これがベースとなっています。

次のスライドでは応急対策としては矢板という鉄の板を打ちました。まともな構造物を作らないと力学的には持たないのですがそんなことをやる時間がないので、とりあえずこの矢板を打ってこの後ろに土砂をどんどん入れて堤防を作りました。



この矢板をどこに打つかというのを例えば鐘ヶ江市長さんとここに打ったがいかとか地元の要望を聴きながら打ったということです。

このスライドはあまり見たことがないかもしれませんが、中の間川、赤松谷の対岸ぐらいのところですが、ここにこんなフェンスがあります。これは世界で初めてだと思いますが、火砕流の雲の部分を上を挙げるフェンスです。ちょうど中の間川を越すと深江町の住家のところに火砕流が行く可能性が高くなる、危険性が高かったのでこのフェンスを作ったのが当時の応急対策の1つです。



次に無人化施工をやりました。発案は私自身で元々雲仙復興工事事務所でいろんな対策をしていたのですが、火砕流とか土石流が危険なので作業員は死んでもいいから作業して来いとは言えませんので、火砕流や土石流が流れ下るところの対応ができなかったのです。でもできないといつまでたっても被害は増えるばかりです。悩んでいた時にたまたまテレビで月でロボットアームを地上からコントロールして動かすようなことをアメリカのヒューストンでやっていました。月まで電波でコントロールできるなら地上だって電波でコントロールできないかと思って、当時の建設省の機械課長さんにブルドーザとかダンプトラックとかの機械類を運転手無しで無線で操作できる技術はないかと聞いたところ、たまたま研究しているところが2社ありました。2社あるなら競争原理が働くねということで次の年の春に当時の建設省の技術提案型の公開の募集をしました。公募の説明会にアメリカから3社来たのを覚えてます。全部で100社くらいの方が説明会に来ました。

スライドは3号遊砂地付近で実際に動いている11tのダンプトラックです。タイヤだけで2mくらいある大きいものです。これはバックホウです。ブルドーザはちょっと見にくいですが、運転席に人は誰もっていません。全部無人でオペレートしてブルドーザで土砂をかき寄せてバックホウで土砂をダンプに乗せてダンプいっぱいになると無人で走ります。こういう仕組みを作って穴を掘ったんです、国道57号の



上の3号遊砂地付近に畑や川を借りて穴を掘ってそこに火砕流や土石流は流れてきたらたまります。たまったらまたそこを掘る。そういう仕組みの無人化を設計しました。少しでも災害が下流に広がること、とくに人家や財産に影響を及ぼすのを防ぐということです。この作業をするオペレーターは非常に美しい女性群がやられたのもみなさん覚えていませんか。正月の新聞に振り袖姿でオペレートしている写真が載ったのも話題になりました。こういうこ

とで応急的な対策をまずやりました。ただし応急的だと当然のことながら恒久的にはなりませんので、同時に恒久的な対策もどんどん進めていったわけです。

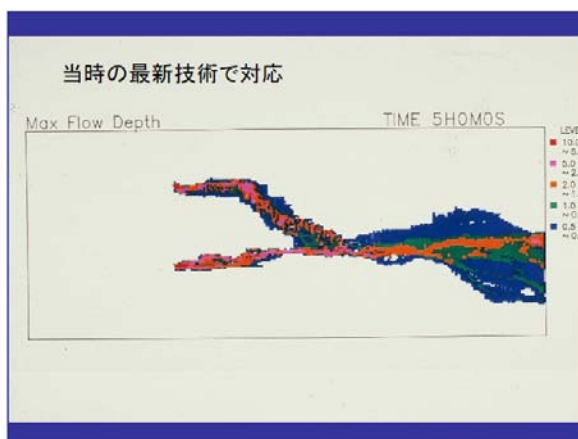
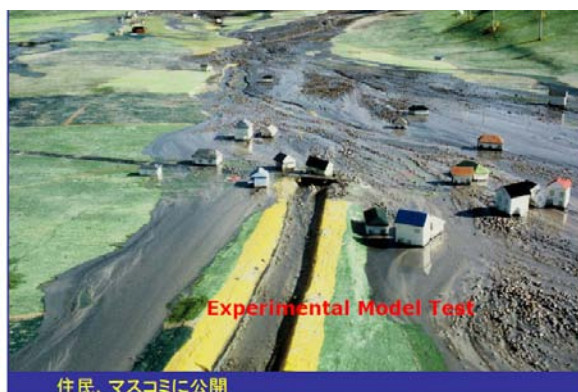
火山防災対策のマスタープランは 1992年 2月 22日に発表されました。発表する前にまず水理実験をしました。地元の方で何人か筑波の土木研究所に行って頂いたと思いますが、マスコミ、地元みなさんに公開実験をしました。何も対策をしない時はどうなるか。まっすぐ抜けてきます。対策をしたらどうなるか。こういう効果があるというのを見てもらいました。

当時の技術としては、20年程前ですが、一番新しい技術と言われていた数値シミュレーションを用いて計算をしました。これが水無川、これが赤松谷、これが元々の水無川、うすくグリーンに見えるここに流してみるとどういうことが起こるかという土石流の水深、厚さ深さがいちばん深い赤い色の流れはまっすぐに抜けています。こちらには来ません。エネルギーが大きい分だけまっすぐ抜けます。先ほどの水理実験でもまっすぐに抜けています。実際6月30日もまっすぐに抜けていますので、こういうことをベースにしてまっすぐに抜けるということで逆ハの字型の導流堤を作りました。水無川そのものはそのまま生かすということにしました。

こんな計画を作ってこれも公表する前に市役所で縦覧して、住民の皆さんに見てもらい、意見を頂くという縦覧方式で計画を作りました。効果の議論もちろんやまして、浸水区域がどのくらいあるか、人口がどのくらいか、家が何軒あるか、対策をしないと上の図で、対策をすると守れるものが安全というデータです。着々と応急対策、恒久対策をやっていたのですが、実

火山防災対策マスタープラン

長崎県によるマスタープランは、砂防のみならず、都市計画、社会学などの専門家により構成された委員会で検討され、1992年2月22日に公表された



際には計画が決まって用地交渉に入るとなるのですが、その間に安中地区の災害がありました。

これは某新聞ですが、防災計画になってないじゃないかと大変お叱りを頂きました。我々からするともうちょっと早く用地が何とかなれば、対応もできたんじゃないかと思うところもあるのですが、こういう話があったという事実をみなさんに紹介します。というのが同じこれは新聞ですが、反対から協力にという見出しで基本的には地元のみなさんがこういうことに対してご理解を頂いたことが一番大きなポイントになったということ強く言いたいのです。みなさんのお声がなかったらなかなか前へ進みません。災害対策1つ取ってもなかなか前へ進みません。そういう意味ではみなさん方のお力は非常に強いということを改めて思いました。みなさん方が逆に自分たちのまちをどう復興するか、どう復旧するか、こういうことをやはりみなさんが考える。その主体であることに気づいていただけるといいなあと思います。実際復興を目指して何があったかということをご紹介します。

真の復興とは何かと考えると、私は住民の生活再建とまちづくりじゃないかと思えます。生活再建という幅がありますが、まず生活基盤の安定です。生活基盤と同時にもう1つ、生計基盤、生きていくうえでの基盤がないといけません。まず生活基盤ではどんなことをやったかという、当時はあまりやっていないことをやりました。例えば土地をどうするか、水無川の上流域の上木場付近では火砕流で土地の境界がわからなくなっていました。ところが実際土地を購入する場合は国の用地交渉で境界をちゃんと確認して土地が決まるという仕組みです。でも火砕流が何mも堆積しているので、そんなこと

被害想定

水無川



	Shimabara City	Fukae Town	total
Inundated area	286 ha	453 ha	739 ha
Population	1,100	3,600	4,700
Number of houses	300	890	1,190
Number of establishments	20	150	170
Number of public facility	8	46	54
Number of Education Facilities	2	5	7
Number of hospital	2	7	9
Main road	Route57 Route251 - Shimabara railway		
Main rail			

新聞では(May,14th,1993)

朝日新聞 1993年5月14日 記事

(Aug,1st,1993)

長崎新聞 1993年8月1日 記事

災害復興とは・・・ 住民の生活再建と街の復興

- ① 生活基盤の安定
土地 + 家・・・境界確認、価格(上流域)
安中三角地帯・・・自己の負担減、減歩減
- ② 収入・・・観光
観光客の復元＝安全宣言、土地の利活用
- ③ 島原鉄道の再開(災害復旧)
- ④ 街の安全宣言、活性化のネタ作り

・ 住民の声を如何に生かすか。

はできないのです。そういう意味で航空写真と地籍図をベースに立会いをして頂いてみなさんの了解を得て土地は大体このくらいだというのを決めて支払うベースを作りました。これは多分日本で初めてです。もう1つ土地の価格ですが、土地も火砕流が1mも2mも堆積するとある意味で地目というのですが、土地の利用用途は宅地じゃなくなります。荒れ地と同じ価格になってしまいます。そうすると坪500円く

らいになる。坪2万円とか3万円とかするところでも500円になってしまいます。そんなところを100坪と言われても再建できますか。まず生活基盤の安定が不可欠だと思います。そこで仮に坪1万円のところだったらなんとか1万円に近い、500円じゃなくて1万円に近いものを出せないかと考えました。こういうことを考えました。雲仙の場合前の噴火から今回の噴火まで約200年、そうすると次の噴火までも約200年あるだろう。少なくともその間はもう1度まちを作ってまちづくりをして生計するという場になりうる。そうするとたまった火砕流を全部取り除いて元の宅地にすればそこは少なくとも200年間は持つのではないかとこの理屈を作りまして、当時の財務部局へ持っていくと割とスムーズに認めてくれました。それで相当被害を受けた土地でも基本的にはその上にある火砕流の堆積物を除去する金はその単価から引くと一番悪いところでも7割くらい、いいところは9割くらいの価格が残ります。そうすると生活再建、例えば別のところに家を建てることは可能だろう。こんなことをやったのが、土地と家の生活基盤の対策です。

水無川下流域の安中三角地帯の嵩上げは大町さんが中心となってやったものですが、三角地帯の嵩上げをやるうえで問題になるのは、家を取り除いて地上げしてまた家を建てる、その金をどうするかです。そこで考えたのが三角地帯に復旧工事が出てきた土砂を捨てさせて頂く、捨土料という言葉を使っていますが、一種の土捨て場です。料金を払って土砂を捨てさせて頂く、その料金をベースに三角地帯を復興するという仕組みを作りました。若干減歩はありましたが減歩中でも安中の減歩は私がみた中では一番減歩率が少ない方だと思っています。できるだけ減歩率を下げる方向で安中の復興をしました。これが生活基盤です。

生計基盤のために何をするか、後半の話になりますが私は観光を復元する、土地利用をもっと活発にする、火山利用といったほうがいいかもしれませんが火山地帯で湧いている湧水、島原は水が有名なところなのでこういうものをもっと活用することをやったらどうかなあ、

用地確保の方法

- 地価の価格を災害前に極力近づける
 ……同じような生活を可能にする
- 火砕流堆積地での境界確認
 ……出来るだけ早い生活再建
- 地域の絆を残す……同じ場所への移転
- 土捨て料の活用……自己負担を減らす
- 地元の皆さんとの協同作業が必要

安中三角地帯の復興計画



約6m、嵩上げされました。

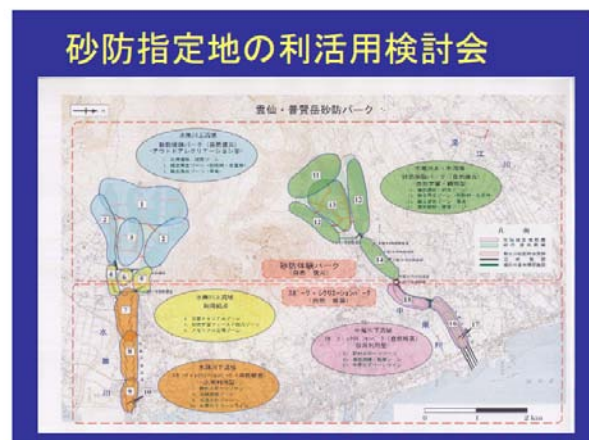
それで収入源をきちんと作ったらどうかなあとと思います。3 つ目に島原鉄道の再開、地域の足なので、災害復興で 90 数%までたぶん島原鉄道の負担なしで復元しているはずです。そして問題は何かというと町の安全宣言、早く「島原市は安全だよ」といってやらなくてははいけないと思います。危ないと思った人はなかなか島原に来ません。そんなことをやったらどうかということ、このまちづくりの先ほど話したように地価は災害前と同じに近づける。同じような生活ができるようにする。できるだけ早く境界確認ができることで生活再建が早くできるようにします。移転するときはなるべく同じ場所に同じ地区の方々に移転してもらう。土捨て料の活用で自己負担を減らす。こういうことをまさに地域のみなさんと一緒にやってきたというのが今日の1つの答えではないかと思えます。

例えば安中三角地帯では6 mほど嵩上げしました。茶色は住居地、グリーンは農地、一番上のほうは万が一土石流が乗り越えても農地の中で最小限止まる、人家まで行かないという仕組みまで含めて先端部の安全、人家になるべく被害が出ないように全体的に計画を見ている。

今日も見てきたんですが、非常に立派なまちができていますので安心しました。

砂防指定地の中を何とか利活用できないかという委員会を作っているいろんな案を提案しています。すべてができていないかは確認していませんが、今の時点でこれを見直して今にあった指定地の活用、こんなことをやれるといいと思います。

災害後、復興という言葉がでてきますが、普賢岳災害の復興とは何かというと、現在までに行われてきたまさに 20 年という歴史の中で行政と住民のみなさんが一体となってまちづくりをがんばってきたことと思います。その中のベースは何かというとみなさんが故郷、この安中を含めて島原を思う気持ちが成し遂げたのではないかと思います。これからが今日の本題の1つで私の思いをみなさんに伝えたいことです。私が思っている復興とは先程言ったように生活基盤、例えば家とか土地とかの復興、これは間違いなくできたと思います。



災害復興

- 普賢岳災害では行政と住民が一体となって街づくりに頑張った。
- 「故郷を思う気持ち」が災害からの復興を成し遂げた。
- あれから20年、今の島原は・・・
- 生活基盤は出来た、生計基盤は・・・

これはみなさんの力でまた行政と一体となった力で前に進んだと思います。でも本当の意味で復興になっているか。生活基盤ができたというのは復旧のレベルではないか。真の復興とは何なのかというとやはり生計基盤、メシの種をどうしていくのかというのがまだまだ必ずしも十分できていないんじゃないかと思えます。もっともっとみなさんががんばって生計基盤を復興していくことをやられたらどうかなあというのが私の提言です。そういう意味では復旧はできたけど復興はまだまだではないかというのがこの20年の私の感想です。ではどうしたら復興できるかということではほかの火山災害も含めて過去の火山災害の復興事例を紹介しましょう。

十勝岳の1926年、大正15年の火山泥流で上富良野町では137名が死亡しました。当時の上富良野村の吉田村長さんがこんな決断をしています。畑、水田が全部やられた。しかも十勝岳の土砂は硫黄を含んでいるので農地に適さない。それで農地は壊滅的でもう駄目じゃないかと言われた。しかも村では137名も亡くなっているの上富良野村の存続が危ぶまれた。それで当時の吉田村長さんがどういう決断をしたかというと、この1926年の災害の実に30年前の1897年に上富良野には三重県から多くの方が移住して三重団地というような地域を作っていました。北海道に入ってきて何もなかったところからまちづくり、地域づくりをしたという苦労はすごく大変なことでした。要するに先祖の努力を災害を1回受けたからといって見捨てることはできないとこの村長さんはほとんど休みなしに仕事をされて、まず硫黄がたまった畑をどうしたかというと、天地返しと言って穴を掘ってその中に硫黄を入れてその上に元の土を乗せるといって、上と下を逆転させる天地返しという手法を使って畑、水田を作りなおされた。結果的に6年目に1町で60俵と元の収穫に戻ります。要するに米作りという産業を、メシの種をきちんと6年間で戻しています。故郷を思う気持ちと十勝岳との共存という結果を十勝岳ではできました。

次のスライドは私が勝手にゴジラの背中と呼んでいる有珠山の一部です。有珠山

過去の火山災害からの復興

十勝岳(1626)

- 火山泥流災害と街の復興(首長の決断)
- 上富良野村の被害・・・137名死亡、
畑 150町歩、水田 300町歩
特に畑地は復旧不可能・・・放棄か
- 吉田村長の決意
「30年の苦心を今見捨てることは出来ない」
(1897年に三重県より移住)
耕土を天地返しして地力を回復、6年目には1町で60俵・・・復興
- 故郷を思う心が十勝岳との共存を成し遂げた



ではどうしたかというジオパークということで火山の災害遺構を活用した観光を活発にやっています。具体的にテーマを決めて、例えば遊歩道を作って説明していく仕組みも全部できています。雲仙も杉本さんの努力で島原半島ジオパークもずいぶん進んでいますが、徹底的にそこまでやるのかという判断がいるのではないのでしょうか。まちづくりがすんだらもつと徹底してやらなきゃいけないんじゃないか。これが有珠山からのメッセージです。

雲仙普賢岳の1792年の災害からぜひ皆さんにお伝えしたいことがあります。ご承知のように眉山が崩れて島原では約1万人が亡くなりました。安中ではないが、島原のほとんどの人が大災害を受けています。この復興として何をしたかという島原藩はまちを再生しよう、神様を再建しよう、白土湖それから橋が全部壊れているので、土木工事をしよう、道路を復旧しようとういうことをしました。行政がまず決断を

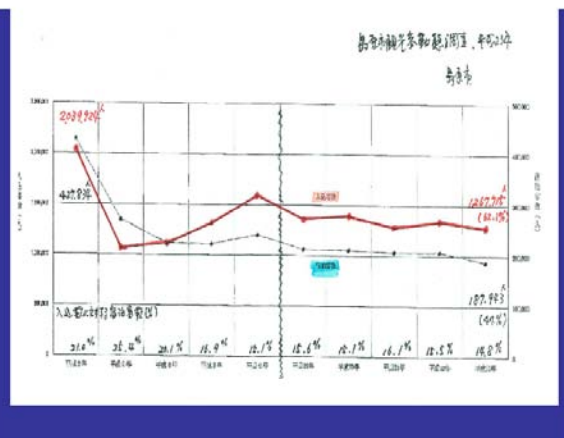
しました。実際にやったのは例えば神社の再建はほとんど町人からの献金なんです。まちづくりは幕府から金を借りて工事をするのですが、その利子返済には農民から金を借りて返済しています。よく考えると行政だけでやったのではなくて地域の住民がまず金を出して、白土湖の工事等には住民の勤労奉仕、工事のために皆さんが出かけています。すなわち労力も出しています。200年前の皆さんの先祖のご努力は何かという行政と住民が一体となって地域の復興に当たった、そしてその結果今の島原があるんです。だから今のみなさんからすると島原はいいまちですよ。いいまちが残ったのは何故かという200年前のみなさんの先祖が本当に頑張った1つの証拠ではないのでしょうか。200年前のみなさんの先祖ができたのなら200年後にみなさんの子孫がうちの先祖は平成の災害で大変だったけどものすごく頑張っていていいまちを作ってくれたよねえ一っついてももらえるようなことをみなさんならできるんじゃないのでしょうか。私はそういう気がしています。

それで今日はあえてこれから島原の1つの事例ですけど観光という視点で見たときにどういうことが考えられるのかを

雲仙普賢岳(1792)

- 山体崩壊災害と街づくり(町人や農民の活躍)
- 島原藩の決断・・・街の再生、祭神の再建、土木工事・・・道路の復旧、橋の改築
- 神社の再建・・・町人からの献金
- 幕府からの借金の返済・・・農民からの借りる
- 島原大変は行政と住民が一体となって地域の再建にあたった。

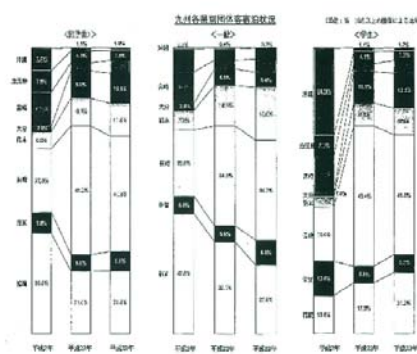
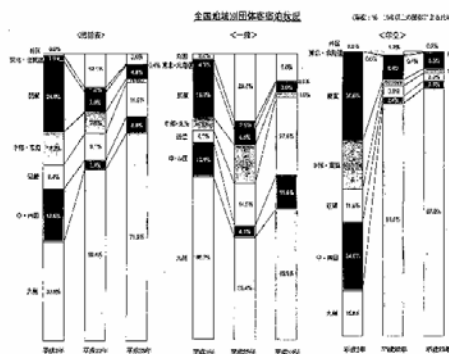
島原の現状は・・・？



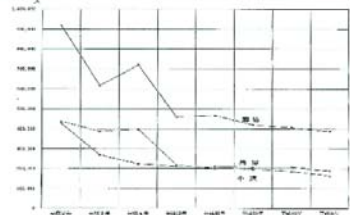
話したいと思います。今回お話をする機会を与えられたので、島原市役所より資料を頂きました。

1990年の島原市の入込客は2,039,924人、2011年は1,267,715人です。6割くらいに減少しています。1度客足は落ちて、これは仕方ないですね、そして1度戻りかけるのですが、また結果的には少しずつ下りかけています。これが入込客数のデータです。宿泊客数は黒線です。最初200万人くらい来た時に何人くらい泊まったかという島原に43万人くらい泊まっています。そうするとこの入込客数200万人に対して宿泊した数は21%、2割の方が泊まっています。いまはというと128万人に対して18万人ですから14%しか泊まっていません。泊まる率もそうですし元々母数となる、入ってくるお客さんの数も減っています。当然ながら泊まる客数も減ってきます。これが観光という視点から見た島原の実態です。これは全国的にも九州でもこんなもので減っているのなら仕方ないのかなあと調べてみると九州は率としては1990年と2011年を比べると増えています。一般客ではなくて学生がものすごく増えています。修学旅行が増えていることを意味しています。トータルすると九州地区は増えていると覚えてください。

九州の中で長崎って増えていますよね。九州が増えていて長崎も増えています。なんとなく「えっ」と思いませんか。島原だけずっと減っているけど九州も長崎も増えているんです。もう1つ宿泊客のところでは平成2年にガサガサと下がっているのは雲仙です。これが島原でその下が小浜です。3つの地区とも1990年に比べると減っています。「えっ」とい



地域	1990年	2011年	増減率
北海道	1,234,567	1,345,678	10.6%
東北	2,345,678	2,456,789	4.7%
関東	3,456,789	3,567,890	3.2%
中部	4,567,890	4,678,901	2.4%
関西	5,678,901	5,789,012	1.9%
九州	6,789,012	7,890,123	16.4%



入り込み客は多いが泊まらない

- 何故島原に泊まらないのか？
- 他に良いところがある・・・長崎市内？
- 時間を費やすものがあるか？例えば2～3日は必要なもの、いくつもの食べたいもの等

う感じですよ。この中の小浜だけでも、雲仙だけでも増えていけばそれはそれでいいかなあという気もしますが、島原半島全部が減っている。ということはあの泊まっている人とか来ている人はどこに行くのでしょうか。簡単にはわからないけど長崎とかハウステンボスとか別のところに行っている可能性が高いと考えるのが常識的かなと思います。少ないと言っても100万人は超えているので、それなりに来ているわけです。なぜ島原に泊まらないのか、他にいいところがあるのかもかもしれません。それから島原で時間を費やすものがありますか。島原に2,3日は居てみたいよねと思うようなものがありますか。島原でしかこれは食べられない、島原でなくちゃこれは体験できない、そういうものがありますかといったときみなさん胸の中にパッと思い浮かぶものがあるのでしょうか。

と、ずいぶんみなさんに冷たい話をしていますが、それだけで終わりにすると帰してもらえそうにないので、少し課題の解決のために私なりに知恵を絞って考えてきたことを2,3枚のスライドをお見せしてあとは何度も言うようにみなさんが本気でどれだけ考えるかに答えはいきつのですが、課題解決のために外からのお客さんを島原だけに呼び込もうという考えはやめた方がいいのじゃないか、そういうことはなかなかできません。あるんだったらとっくに島原に来ています。来ないのはなぜか、島原だけじゃだめだから来ないのです。課題は2つあって1つは島原だけでも行きたいというものを作ることです。もう1つは島原だけじゃなくて地域連携、最近の旅行の行動の方向を見ると1つは行動範囲がとても広がっていること。もう1つはニーズが多様化しています。いろん

な、これをやってみたいという方が増えています。最近女性の中でも歴女、歴史に非常に興味を持つ女性とか、鉄女、鉄道ファンの女性とか1つの項目ごとに女がつくような言葉があります。どういう訳か男はないですね、これは女性の方が興味が多様化して行動力があってなおかつ財政力をもってからではないでしょうか。たとえば連携といった時、外国から来る人のための地域連携として日本の中にゴールデンルートというのがあります。東京にまず入り、買い物や見物をする、次に富士山に行きます、富士山を見てすごいなあ、次に京都で歴史、文化を見ます。最後に大阪で買い物して帰る。これが東京—富士山—京都—大阪というゴールデンルートです。これに対して最近中部圏登龍線と書いて名古屋から飛騨高山に抜ける地域連携を作っています。そこに外国人を呼び込もうというものです。これは同じものではだめですね。東京にある同じものが富士山にあるか、違うものがあるから先程の多様化が

課題解決のために！

- ① 地域連携
自分の所だけ良くすると言うのは難しい
 - ・ 行動範囲が広がる
 - ・ ニーズが多様化
- ② 他の所にはない独自性
島原に泊まってでも体験したいものは
 - ・ 物見型から体験型へ
- ③ 再び来てみたいという気持ちにする
 - ・ 心に残るもの、もてなしの心

行政・住民は何をするべきか、何が出来るか！

- ・ 多様性の創出
 - ・ 体験の場を作る・多様な内容
 - ・ 名物、食べ物を作る
 - ・ 見るところを作る

行政の役割・・・入込客の増加対策
住民の役割・・・観光客へのもてなし、リピーター

図れるんです。島原はというと島原をニーズが違うところと組むという手があるんじゃないかと思います。これは私の勝手な案ですが、まず長崎に入ります。長崎でうまい食事をして原爆とか歴史を見ることもあるでしょう。そして長崎から島原に入ってもらって歴史、火山、自然、文化、お城、こういうものを島原の乱とかを見てもらう。最後に福岡で買い物をして帰ります。要するにそれぞれニーズが違うものを並べて1つの道にしてルートを作ります。こういうことをやっていくと島原に人が来るという可能性はあります。

ちなみに今東南アジアの方がどういうものに興味を持っているかご存じですか。3つ挙げるとすると何があるか。1つの事例でいうと日本食という食文化、すし、てんぷら、すき焼きなどの食文化です。もう1つは温泉です。3つ目の東南アジアでのキーワードは雪です。そこに目をつけて頑張っているのが富山県。富山県は台湾で立山の温泉と立山の雪をPRしています。そして富山湾の食をPRしています。その結果台湾の方が富山にたくさん来ています。最近タイ、インドネシアから日本に来られる方も温泉や雪をキーワードにしています。雪はこの島原ではちょっと難しいですが、その代わりにいろんな歴史や活火山もあるし、そういうのをやったらどうか。雪の代わりに歴史や文化を入れていくのもあるということを考えてらどうかというのが1つです。他のところに無い独自性として昔は物見遊山と言って農閑期になると温泉に行って一杯飲んで帰ってくるというのが多かったけれど、最近体験をする、何か自分で作ってみるとというのが結構いいんじゃないか、そんな体験型のものを何かできないでしょうか。島原、小浜、雲仙では増えていないから学生用のメニューを作ったらどうでしょうか。雲仙岳の〇〇を見せる、具体的にこういうところを見せて火山を学習してもらおうというメニューを作ったらどうでしょうか。当然ジオパーク構想もあるのでジオパークとタイアップして具体的にどう動かすかということも重要です。

ちなみに少し調べてみると島原の特異性と言いましょか、こんなのがあります。本光寺には混一疆理歴代国都之図、16世紀に朝鮮で作られた世界地図が日本の3カ所にあるのですが、そのうちの1つが本光寺にあります。そういうのはここでしか見られないんです。そういうものに興味のある人にとってはこの地図を見るということはものすごく興味のあることです。まさに歴女なんかはそうです。先日テレビを見ていたら、食べ物の話ですが、長崎ちゃんぽんの麺を東京のある長崎ちゃんぽんの店が麺は全部島原の杉村屋さんから買っていると言っていました。そういう、ここしかないというものを作っていくのも1つの独自性だと思います。そのために1日費やしてみようという気になったりもします。最後はおもてなしの気持ちです。リピーターが来るか。何をすべきか、何ができるかという多様性を作る。体験学習の場を作る。それは多様な方がいい。食べ物、名物を作り、具雑煮とかありますがそれでオールジャパンでB級グルメの大会に出したら勝てますか。皆さん笑われますが、B級グルメで1番になるとものすごく人が来るんです。経済効果はものすごいです。例えば1つそういうみなさんで安中でB級グルメを作る。今日は女性の方がたくさん来ておられるので、B級グルメに挑戦してみるのもいいと思います。

見るところ、単なる物見遊山はだめでそこで体験するか、学習するか、何かするところを作る。きのう定点にお参りさせていただきましたが、定点の付近にすごく大きな石がいっぱいごろごろしているのを見ました。あの石を小学生なんかにかこんな石がゴロゴロと流れて来る

んだよと自分の背の丈と比較して石の大きさを実感してもらおうというのもまちに住んでいる方には体験できないと思います。自然の凄さを自分の体験で感じるというような、例えばトレッキングロードを作る、というのもあるかなあという思いで、昨日は定点付近を歩きました。学習という点では、国際会議やいろんな学会を呼んでくるのも1つでしょうし、何よりも鉄女でいうと本当は島原鉄道のトロッコ列車がすごく興味があったんじゃないかなとあれが水無川を通過できなくなり、鉄橋の跡を見てきましたが、線路が無くなったのは残念だなあという気がします。安中側では比較的少ないですが、島原全体でみると湧水がとても多いです。湧水を活用したことをもっともつとする。行政の役割、住民の役割で市長さんもいらっしゃるのでぜひお願いしたいのは安中だけがよくなればよいというのではなく、私は島原全体がよくなってほしい。安中の被災地もよくなるし、旧市街地、お城の方もよくなり、商店街の方もシャッターが下りるのではなく人が来るような仕組みを作るというのが重要ではないか、すなわち被災した人としていない人が一緒になって議論する場をぜひ市長さんに作って頂いて島原には何が必要かという議論、復興計画、生活設計、メシの種をどうしていくのという将来の100年後、200年後の子供たちにどう残すかということを考えてもいいのではないのでしょうか。

噴火から23年、大規模な土石流災害から20年がたちます。みなさんが自分たちの子、孫、もう少しあとの子孫に何を残すか、自分たちのまちをどういう風子孫に残していけばいいのかをもう1度復興という視点で、お考え頂くというきっかけの場に今日がなっていくと私は大変うれしいです。その時のベースは何かというと、雲仙普賢岳とどう付き合っていくのか、島原を全体としてどうするのか

を被災地のみなさんだけでなく被災しなかった人も含めてみんなで考える場を作って、皆さんで素晴らしい島原を作り200年後、300年後の子孫たちが素晴らしい先祖がいたねと話題にしてもらえると私としては大変うれしいなという話で終わります。

ご清聴ありがとうございました。

5 参加者とのディスカッション（長崎大学名誉教授 高橋和雄）

司会

池谷様ありがとうございました。今日の講演会のタイトルは復興という文字を使っていますが、「本当に復興したのか。まだ復旧だけなんじゃないの」と言われたときにはちょっとドキッとしましたがけれども、そのあと最後には専門外のどうやったらこの島原を活性させるのかというところまで踏み込んで提言を頂きました。ありがとうございました。ぜひこの話をベースにして、高橋先生をコーディネーターにしてこれからの島原のまちづくりということについて残り30分程度ですが、皆さんで議論ができればと思います。高橋先生よろしくお願

最後に皆さんへ

平成噴火災害から20余年、次の噴火時に子孫から先祖は素晴らしいことをしてくれていたといわれるためにもう一度災害時の気持ちを思いだし、

- ・ 雲仙普賢岳とどうつきあうのか
- ・ 島原をどうするのか

被災地の皆さんだけでなく被災しなかった人も含めてみんなで考えることが今、必要なこと

い申し上げます。

高橋

今日の集まりを本当は昨年で開催したかったのですが、1年遅れで実現しました。安中地区でも復興が終わってまちづくりもこれでいいのじゃないかという声もあり、関係者が高齢化して活動が停滞しており、皆さんの取組みが大きな曲がり角に来ています。この島原で火山災害が起こった時に島原のことを本当に真剣に考えて頂いて、安全の確保から生活再建までの道筋をつけて頂いた池谷様がまだ物足りなさを感じているのではと考えて、もう一回島原に来て頂いてお話を伺うことを企画しました。これまでのことを振り返って頂いて、皆さんにエールを送って頂いたわけです。

せっかくの機会ですから、池谷様の講演をもとに、ご質問やご意見を出して頂きたい。生の意見を頂けたらと期待しています。先ず、池谷様の講演に対して質問がある方がおられたらぜひお願いします。

Aさん（男性）

市内の秩父が浦町内会に住んでいます。先ほどの話で興味を持ったのは、家屋と土地の売却をする時の方法が全く無く、それを国土交通省（当時建設省）の方で考え方を整理して200年後は価値があるぞ。だからそれだけの値段をつけて下さいということを提案して、それが通ったというところに興味を持ちました。標準的な方法が全く無くて、新しく作っていつているのですか。他の場合も例があったら、お話して頂ければと思います。

池谷

家と土地と言いましたが、基本的には土地です。家は一般的にいうと保険で処理するのがほとんどです。特に上木場地区場合は保険でやっています。土地はそれ以降、大きい災害としては三宅島の噴火がありました。三宅島も同じようにやったらどうかと思って提案しましたが、東京都はお金がありまして、そこまでやらんでもいいということでやって



いません。今のところ雲仙普賢岳の噴火災害で止まっています。しかし、仕組みとしては1回実施したので、次の時に実施する可能性は一応できており、少なくとも基本的には道は作ったかなと思います。

何度も言うようですが、生活基盤を先ず戻さないで。自分の家もない、土地もない、どこに行ったらいいかわからない人達に復興しろとか復旧しろとか言ったって、これは無理なわけです。先ず自分たちがここに住んで大丈夫だなと安心してから初めて皆さんは本気で復興なり、生活のことを考えられる。そのために国に何が出来るかという意味では私は決して悪い仕組みではないと思う。他のところでぜひ使ってほしいと思うが、三宅島の噴火の時に、東京都に呼ばれてアドバイスをくれと言われて行ったのですが、結果的には三宅島では使っていません。

Aさん（男性）

その考え方は個人的に気づかれたのですか。それとも部署でみんな議論した結果ですか。

池谷

個人的です。組織としてはあまりそんなことはやっていません。やっぱり基本はルールがあつて、例えば火砕流に埋もれば何も価値がない土地になってしまいます。土地を買う時に皆さんも用地交渉でいわれたと思いますが、現状の状況でどういう土地かを判断する仕組みになっています。これが基本です。例えば、2mの火砕流が溜まっていると荒地ですよ。宅地じゃないです。ですからそこを宅地というのはかなり度胸が要りますが、1人や2人対象の議論ではありません。1つの集落全体の人達の生活再建を対象にしています。1人だったらたぶん義援金とか基金とかでの対応で終わったかもしれませんが、そういう議論は無理です。1つのベースがあつて砂防施設を整備する砂防指定地という土地が必要で、そうでないと国が買えない。警戒避難というソフト面も重要ですが、家と土地を守ろうとするとどうしてもハード対策が必要です。ハード対策があるよということを明確に打ち出してそのゾーンの中にある火砕流堆積物があるところは、それを土地として買いますとか、値段を宅地として買いますよという評価をしたということです。評価の仕方の議論でベースはハード対策ができるということです。

高橋

これまでの国土交通省の事業でしたら、防災施設を整備することだけが役割ですが、雲仙では最初の段階から生活基盤の再生に十分配慮した計画となっており、このことが今日の復興につながったと評価しています。災害対策や復興についての仕組みについて何かご意見はございませんか。無いようですので次に行きたいと思います。雲仙での砂防工事はほぼ終了して、安全の確保は飛躍的にできましたが、溶岩ドームの崩壊が心配されるように火山地では火山と共生していくことが今後も必要です。そこで、復興は終わったからこれでおしまいではなく、次世代にどう継承していくかについて、地域の考えをぜひお聞かせ下さい。

Bさん（島原新聞社清水様）

今日は記者ではなく、被災しなかった住民として話を聞かせてもらいました。先ほど池谷さんから観光の話がありましたが、やはり島原の場合は雲仙とか小浜との最大の違いは湧水だと思うのですよね。私の会社は白土湖のそばにありますが、今は水藻が繁茂して見苦しい限りです。その対策を毎年業者をお願いして実施されています。島原市自体が財政的にも苦しい状況にあると思うので、ぜひこれまで島原に目をかけて下さったので、これからは湧水の対策を国土交通省ということで観光も含めてよろしくをお願いします。



高橋

白土湖やわれん川も水温が高く水藻が繁茂して管理が大変なようですが、湧水対策について池谷様、何かアドバイスがありますか。

池谷

私が先ず提案したのは藻の話の前にせつかくある湧水の活用の提案です。火山地帯はどこも湧水が多いです。なぜかという火山の山体はポーラスと言いまして水を通しやすい性質を持っています。火山灰が積もるまでは割と水を通しやすい。富士山でいうと柿田川とか白糸の滝とか周辺にいっぱい地下水が湧き出しているところがあります。島原もまさに水と緑のまちと言われるくらい水がいっぱいあってきれいなまちなのですね。その湧水がどこでどうあるか、どのくらいの量があるのか、何に使えるのか。例えば場所によっては真水ではなく、炭酸水が出る場所もあります。ですから、水の性質も含めてどういう状況かを先ず調べて何に使えるかをベースにしてみんなで議論する。その中で藻の議論も一緒にやれたらいいんじゃないか。先ずは何に使えるか、どのくらいの量かということもまだ把握できていないようなので、出来ればそういうことをやられたらという提案です。

高橋

古川市長様いかがですか。

古川市長

水の専門家ではないので、専門的なことはわかりません。白土湖も地球温暖化なのでしょうか、本当に見苦しい状況が続いています。反省も込めて、対策を検討しているところです。

噴火から22年が経過していろいろなことが歴史の1頁になりつつあります。その中で雲仙岳災害記念館、がまだすドームがしっかりと災害伝承をしてきたという事実はあると思います。しかしながら、開館から10年が経ちますと、1度見られた方はなかなか2度に来ず、段々入館者が減っているのも事実です。そんなことを考えた時に今日の池谷様の後半の話の中でいかに人を集めるかという部分でまさに物見遊山的なものから体験的なことを目指すということに非常に興味を持ちました。

災害地でしかできないこと、雲仙普賢岳のあるこの島原市しかできないこと、体験を盛り込んでいけば更に島原半島ジオパークという火山を共有する3市があるわけですからそういったものにポイントを絞って取り組んでいきたい。生活基盤はできたけれど、生計基盤ができていないという指摘は本当にその通りだと思います、湧水を含めて真剣に取り組んでいきたいなと思います。

高橋

復興の後の生計基盤の再生を振興と私たちは言っているのですが、生計基盤の再生の方がダイレクトで分かりやすいかもしれませんね。観光を含めた生計基盤の再生に、ご意見があればお願いいたします。

Cさん（女性）

3,4年前の話ですが、島原に観光に来た方が親和銀行の前あたりに出る温泉水を飲まれたそうです。2,3日滞在されて体の調子がすごく良かったという。その時私の妹が学校の教師をしておりましたが、校長先生に相談があって、妹から温泉水を送ってもらえないかと依頼があったのです。すぐに市役所に行って、どれくらい温泉水はもちますか、どんな方法で送ればいいのかと尋ねたのですが、その職員さんはあまりご存知ではなかったのです。それで、ペットボトルの消毒の仕方とか、温泉水に何々が入っているのかよくわからないから、送らない方がいいと言われて、妹にもそのままのことを電話して終わったのです。温泉水に

効能があるなら、そういうものも広めるのも1つの方法じゃないかなと今の話を聞いて思いました。

それともう1つ、バレーボールをやっているのですが、いつも遠いところで開催されるので「島原で開催して下さい。島原に来て下さい」と声をかけるけれども、「島原は遠い」と言われたのです。「遠くて不便」と言われると答えようがありませんでした。私たち主婦の間でも長崎空港から30分で来ればね」といつも希望を言い合っています。そのところも女性の不満の種です。以上です。

高橋

温泉水を生かす仕組みができていないのと懸案の交通アクセスの話が出てきました。交通の整備については時間がかかるので、先ず地域でできることを考えないといけないと思います。安中の復興は皆さんの自主的な取組みが一番大きくて、それがあからこそ、行政との連携、支援もできたわけです。今日の講演会の趣旨は今後ともこれまでの取組みを生かして、生計基盤の再生に取り組んで欲しいと池谷様は提案されています。それに沿ったご意見はありませんか。

Dさん（KTN 槌田様）

これから島原が観光で売っていくのか、観光の種は何かということの1つの中に砂防指定地の利活用があります。砂防指定地が今のままではもったいないというふうに私も見せて頂いて思うのですが、利活用の最初の計画の時から見直しをそろそろすべきという話もありましたので、その辺のところを雲仙復興事務所の方にお考えをお聞かせ下さい。

佐藤所長

砂防指定地の利活用に関することですが、砂防指定地は地域の宝、財産だと思っています。これをうまく活用頂いて地域の振興、地域の防災に活用して頂きたい。振興の部分については皆様の考えをふまえてやる人が多いかと思しますので、計画を作って、仏を作って魂を入れる部分、魂を入れつつ形は変わってくるかと思しますので、その辺は皆様と共同で行ければと思っています。また、連携してやればと思っています。

高橋

明日雲仙岳災害記念館で、雲仙復興事務所の開設20周年のシンポジウムがありますので、そこで歴代の事務所長さんも利活用の話をされると思います。次の発言をお願いします。

Eさん（男性）

この安中地区では、働く場所がなくて大変困っています。ここに、工場誘致をして頂き、若者の働く場所をみんなで何とかご検討頂き、将来わが安中の発展のため、島原市の発展のため大きく役割を果たして頂きたいと思っています。

高橋

今までは安中地区のまちづくりだったのですが、安中防災塾を始め島原全体に広めて活動すべきという話もさっきから出ています。こちら辺について何かご意見はありませんか。どうやったらいいだろうとか。時間が迫って来ましたので、大町様一言をお願いします。

大町会長

安中防災塾をおととしから開催しています。これを島原防災塾に変えてもいいかなとも考えています。島原防災塾ともなればやっぱり島原全体で動く格好にしなければならない。市長もお出でですので、市の助成が必要な部分は出てきます。市の助成を得て、安中防災塾を島原防災塾、さらに島原半島防災塾に大きく持っていければいいなと考えています。



高橋

今回長崎大学から参加された建築の都市計画がご専門の安武先生、感想があればお願いします。

安武先生

長崎大学に赴任して3年たちますが、東京の大学に勤務していた時に新潟県中越地震の復興の手伝いをしていました。観光は中越地震の復興でもあって、私の張り付いた集落は農村の40戸位で平均年齢70歳位のところでしたが、観光で人を呼んでもなかなかお金は落ちず、ただもてなすだけで終わっていました。どうやったら、人を呼んでそれから地域の活性化に結び付けるかと考えていました。今東日本でも大きなテーマになっていますので、ここで勉強させてもらいたいと思い参加しました。皆さんが災害遺構として被災家屋を残したことは当時としてはつらいことだったと思うのですが、それを観光というか教育遺産として残し、ジオパークに取り込んだりしたことは東日本大震災の復興に役立つのではないかと考えます。教えて頂ければと考えます。



杉本

東日本大震災の被災地からもたくさんの方がここに視察に来られました。特に災害、被災遺構をどうするのかというのは向こうでも大きな問題になっています。1つは、雲仙普賢岳の遺構保存は、噴火災害が5年間続いた後に住民が残したいとなりました。東北ではまだ2年ですので、生活基盤がまだ定まっていないので、災害遺構の議論をするのはまだ難しいと思う。最後に残すものを決めるのは地域の人達です。行政がいくら残そうと思っても地域の人達がそれをきっちり理解して残そうということにならないとなかなかできません。



地盤の嵩上げとか災害遺構の保存という雲仙普賢岳の噴火災害の復興事例は東北でも生かせるものが沢山ある。雲仙普賢岳の噴火災害でもたくさんの支援を受けてここまで来たわけ

です。今度はお返しをする番でもあります。雲仙普賢岳の噴火災害の復興でしたことを今度は生かしていく。そんな順番かなと思います。

ぜひ、外から島原を見てアドバイスを頂くとともに、他の地域にも伝えて頂ければと思います。

高橋

最後に池谷様、ご意見があるようで発言を御願います。

池谷

安武先生の中越の話がありましたが、地産地消、食べ物とか名物を作るという時は当然のことながら、地元の皆さんだけでなく、農協とか漁協とか地元の商店街とか、そういう方々の協力がないとできない。島原全体としてそういう議論をしていくということが解決のために一番大切と思うし、ひとつの答えではないかと思う。こういう機会に市長さんをご出席ですので、一歩前へ進んで頂くとうれしいなあという気がします。

高橋

活発な討論ありがとうございました。時間が来ましたので、これでディスカッションを終わります。これから、池谷様にご連絡を取りたいときには雲仙復興事務所に問い合わせください。

司会

最後に大町会長から閉会の挨拶を致します。

6 閉会挨拶 安中地区まちづくり推進協議会会長 大町辰朗

これで「安中復興まちづくり 20 年周年講演会」を終わります。まちづくりにこれからも動いていきたいと思っていますので、よろしく御願います。今日はどうもありがとうございました。

官民一体の歩み振り返る

安中復興まちづくり講演会

普賢岳大火山噴流被害から丸22年となった8日、壊滅的被害を受けながら地元住民らと行政が一体となって、ふるさとを復興させた安中地区の住民らが集い、その歩みを語り合った。安中復興まちづくり20周年講演会が安中公民館で開かれ、住民ら約150人が今後の地域振興などについて意見を交わした。写真。

普賢岳大火山噴流被害から丸22年となった8日、壊滅的被害を受けながら地元住民らと行政が一体となって、ふるさとを復興させた安中地区の住民らが集い、その歩みを語り合った。安中復興まちづくり20周年講演会が安中公民館で開かれ、住民ら約150人が今後の地域振興などについて意見を交わした。写真。

本当の復興とは 生計の再生はまだ

また、当時の建設省砂防部長で、安中地区のかさ上げ事業に関わった池谷浩三(政策研究大学院大学特任教授)が「雲仙普賢岳の大土石流災害から20年を振り返って」と題して20年の取り組みと今後の振興策を語り、「生活は再建されたが、生計基盤はまだ再生していないと思う。本当の復興のため、島原のまちづくりについて議論を」と呼びかけた。

「ふるさとの復興を願う」など過去の復興事例を紹介

「いまの島原があるのは先祖が頑張ったからこそ。皆さんにもできるはず」と述べ、独自性のある観光や他地域との連携の必要性などについて語った。

災害危険箇所 南串山で調査

土砂災害防止月間 6月の「土砂災害防止月間」にちなんで県とNPO法人県治水砂防ボランティア協会(瓜生宣憲理事長)が県内4か所で土砂災害危険箇所の調査を行う。島原半島では6月13日午後1時から雲仙市南串山町で行われる。

土砂災害への理解を深め、防災措置の充実・強化





△：22回目の「6・3」

は朝から爽快な気候に恵まれた。振り返ってみればこそその「実感」であるが、歳月の流れの早さに驚く。

△：当時、35歳だった筆者は57歳になった。一昔前ならとっくに「定年」を迎えている年齢だが、いまだに「現役」でいられることは果たして喜ばしいことなのかどうか…。

△：この間、一緒に噴火災害下で苦悩した仲間うちの何人かはすでに鬼籍に入った。かく言う筆者も、あの大火砕流に呑み込まれてい

22回目の「6・3」 池谷さん、島原の現状を叱る

—株CATV島原専務 清水眞守—

たとしても、少しも不思議ではなかったはずだが、はや22年間も生き延びさせて頂いている。

△：朝一で訪れた仁田団地の献花台の前では、多くの報道陣が災害発生当時の島原市長、鐘ヶ江晋一さんを取り囲んでいた。矢継ぎ早に繰り出される質問に、瞠目しながら一つひとつ言葉を絞り出す元市長。その脳裏を横切るものは…。

△：消防団の慰霊碑（平成町）に赴くと、若手の団員諸氏が勢揃いして白菊の花を手渡してくれた。固い齧の形状は志半ばにして散った「無念」の象徴か。

△：その足で安中公民館へ向かった。「安中復興まちづくり20周年講演会」に出席するためだ。会場には懐かしい顔ぶれを中心に、約150人の地元の皆様が集まっていた。

△：特別講師を務めたのは、「土石流災害」(岩波新書)などの著書を持つ、元建設省砂防部長の池谷浩(いけや・ひろし)さん。現在は政策研究大学院大学(国立)の特任教授として、大学院生を相手に教壇に立っている、という。

△：確かな「研究実績」と豊富な「現場体験」に裏打ちされた話は少しの無駄もなく、かと言って官僚出身者特有の堅苦しい言い回しもなく、聴き応え十分、実に分かりやすかった。

△：何よりのこの方は、島原のこと(将来)を心底、慮って下さっている稀有の「人財」である。我々島原人も、もっとこの人の「知恵」を借りる必要があると痛感した。

△：以前と言っても、もう10年以上も前の話だが、ある伝(つて)を頼って建設省本庁に取材のためお邪魔したことがある。

△：…とにかく、広い執務室で最初から下キマキしっぱなしだったが、「ただいま」には

全国の知事さんクラスがやってくるんだ。君は島原からだから、特別だ。」と言っていて、敬待して下さった。

△：その際、どんなやりとりをしたのか今ではすっかり忘れてしまったが、「噴火災害からの復興」にまつわる話だったことだけは確かである。

△：翻って、22回目の今日。詳しくは本紙「記者の記事を読んでいただきたいが、「いまだに復旧段階を乗り越えていないのではなないか」「生活でなく生計の基盤を早く確立せよ」などとする厳しいご指摘には、さすがに耳が痛かった。△：偶然にも、せっかくな頂いた命。まいっぺん、頑張ってみっか!!

安中復興まちづくり 20 周年講演会報告書

2013(平成 25)年 8 月

発行者

長崎大学 高橋和雄

安中地区まちづくり推進協議会会長 大町辰朗

連絡先

〒852-8136 長崎市家野町 1-11-302 高橋和雄

T EL & FAX 095-846-5781

E-mail t-kazu@nagasaki-u.ac.jp